

# 父と娘：Fitzgerald の自己再生と Scottie

西山 久子

## 始めに

Zelda との恋と結婚、それに伴う派手で無軌道な生活、そのために生じた経済的行きづまりと借金。Fitzgerald はその借金の返済と、Zelda の入院費、また娘 Scottie の教育費を稼ぐために自ら trash と呼んでいる短編を 160 編書き、荒稼ぎしたと言われている。

派手で常道を逸した生活を送っているが、精神崩壊を起こした Zelda を抱え、自らもアルコール中毒症に悩まされ、借金の重荷を背負い自殺未遂までしている。実際あまり幸せな生涯を送っていない。

妻 Zelda のことは、多くの作品で描かれ、その存在は良く知られているが、娘 Scottie のことを話題にする人は少ない。しかし、Fitzgerald 伝で “the happiest thing in his life was Scottie”<sup>1)</sup>と語られているように、Fitzgerald が心から愛し、Fitzgerald の心の支えとなったのは一人娘 Scottie ではないかと思われる。160 編の短編のうち、Scottie をモデルにして書かれた作品が 4 篇ある。

ほとんどの短編は、時間をかけずに、即興的に書かれているので、その時、その場の作者の感じたままに書かれていると言われている。それ故、作者の真意を探るには有効である。4 作品を執筆年代順に追ってゆくと、作者の様々な父としての姿と、娘 Scottie との親子関係が見えてくる。

4 作のうち前 2 作——“The Baby party” と “Outside The Cabinet Maker’s” では、Scottie が可愛くてたまらないという父性愛が色濃く表れている。これら 2 作では、Scottie は Fitzgerald の愛の対象として作品に登場するが、後半 2 作——“Babyron Revisited” “Family in The Wind” では、Scottie は Fitzgerald に多大なる影響力をもつ者として登場している。

本論では、特に後半 2 作を中心に、Scottie が果たした役割を探ってみたい。しかし、Fitzgerald と Scottie の親子関係を語る時、妻 Zelda に振り回される家庭状況が大きく関わってくるので、Zelda の状況を考慮に

いれながら述べていきたい。

## 1

娘 Scottie は 1921 年 10 月に、父の故郷、ミネソタ州セントポールで生まれている。4 作のうち 3 作まで Scottie は実年齢で登場している。

まず、ここで、後半 2 作で、Scottie の果たした役割をはっきり認識するために、前半 2 作の父性愛の溢れた作品について少し触れてみたい。

Scottie をモデルにした 1 作目 “The Baby Party” は 1924 年に書かれ、1925 年に *Harst’s International* に発表されている。作者は 2 歳半の Scottie を作中で 2 歳半の Edo として登場させ我が子へ対する父親の感情を露にしている。作品は次のような文章で始まっている。“When John Andres felt old he found solace in the thought of life continuing through his child.” (413) “The Baby Party” 子供とは自らの命の継承者であると本能的に認識し安堵感を感じている。前文章は次のように続いている。“The dark tranpet of oblivion were less loud at the patter of his child’s feet or at the sound of his child’s voice babbling mad non sequiturs to him over the telephone. . . one of the vivid minutes of his day.” (413) “The Baby Party” と、自らの傷心を癒してくれる者であるとも述べている。

作品の最後では次のような文章で締めくくられている。

. . . he (Andros) reached over into the bed, and picking his daughter, blankets and all, sat down in the rocking chair holding her tightly in his arms. ‘Dear little girl’ he whispered. ‘Dear little girl, dear little girl’ Jhone Androu knew at length what it was he had fought for so savagely that evening. He had it (Edo) now, he possessed it forever. . . (423) “The Baby Party”

子供を持った幸せを噛みしめると共に、可愛い我が子をしっかりと守らなければならないという保護本能を伴った父性愛が表されている。

この作品の書かれた1924年とは、Fitzgerald夫妻が、2歳のScottieをつれて、ニューヨークの喧騒を後にし、パリに渡っている。作品を書き上げるためには、パーティーもなく、遊び友達もいなく、耐えがたい空虚感を感じていた時期であった。その空虚感を埋めるようにフランスの海軍飛行士Edouard Jozanと恋愛関係になった。この関係を知ったFitzgeraldは、激怒し、激しい口論になったといわれている。すったもんだの末、元のさやに収まったのだが、目に見えぬ傷はいつまでも心に残り、FitzgeraldとZeldaの間に深い溝が出来始めていた。

2作目“Outside The Cabinet Maker’s”は1928年、*The Century Magazinen*に掲載されている。Scottieは6歳の少女として登場している。作品は“‘Listen,’ said the man to the little girl, ‘I love you.’”という語りで始まり、可愛くてたまらないという父性愛が前面に打ち出されている。妻が、うらぶれた通りにある指物師の所へ、娘の誕生日のプレゼント用に、人形の家を注文に行く。妻を待っている間、車の中で、父は娘のために、御伽噺を創作してやる。“Daddy”という言葉が何回か繰り返して使われ、あどけないScottieの姿と、このうらぶれた街角で、Scottieのために御伽噺を展開しているFitzgeraldの姿が描き出されている。しかし、妻は車から去り、父と娘の間で交わされる楽しい話の中には入っていない。作者は暗にゼルダの心はもう家庭から離れていってしまったことを語っている。

この作品は御伽噺を展開させて楽しむという筋が軸になっているが、突き詰めて行くともっと深刻な問題が浮かび上がってくる。

妻が戻って来て、三人は車でその場を去るのだが、三人はそれぞれ違うことを考えながら、同じ車に揺られて行く。

They rode on abstractedly. The lady thought about the doll’s house, for she had been poor and had never had one as a child, the man thought how he had almost a million dollars, and the little girl thought about the odd doings on the dingy street that they had left behind. (425) “Outside The Cabinet-

## Maker’s”

Zeldaらしき女性は、自分の果たせなかった夢を果たすことを考えている。Fitzgeraldは、借金に負われている状況下で、百万ドルあったらと思っている。Scottieは、父の話してくれたうらぶれた通りでおこった不思議なお話に思いを馳せている。一台の車に乗りながらも、三人三様違う方向を向いている。

この作品の書かれた年、1928年とは、Zeldaがバレリーナになりたいと、バレエの特訓を始めた時期である。我がままで勝気なゼルダは、家庭をも省みず、バレエにめり込んでゆき、焦燥感に駆られ、神経は苛立ち、家庭分裂が始まった時期である。その頃の状況が次のように描かれている。

Meanwhile their home life . . . became unbearable. They “passed each other in the musty corridors hastily and ate distantly facing each other with the air of enemies awaiting some gesture of hostility.”<sup>2)</sup>

これら2作には、溢れんばかりの父性愛が表されているのだが、それとは裏腹に、Zeldaとの溝は大きくなるばかりで、家庭崩壊を迎えていた。

## 2

後半2作では、Zeldaが精神崩壊を起こし、家庭内も崩壊状態にあり、Fitzgerald自身も退廃的自己を抱えていた頃書かれた作品である。前2作の「娘が可愛いという父性愛」の形態は変わってくる。

Scottieが登場する三作目は、“Babylon Revisited”は、1930年12月に執筆され、1931年2月に*The Saturday Evening Post*に掲載されている。

この作品が執筆される少し前、1930年4月23日、Zeldaは極度の不安定状態にあり、じっとしていることも出来ない状態であった。医師に精神分裂症と診断された。Zeldaの精神分裂の原因は、遅ればせながら、バレリーナになろうともがき、極度の焦燥感と、持って生まれた性格、夫への強いジェラシー、夫婦の不和などがZeldaを分裂症に追いやったのであるが、Zeldaの親族の間では、その原因はFitzgeraldの飲酒癖にあると厳しく非難され、Zeldaの入院中、Scottieを面倒見られないのではないかと懸念する声もあったと言われている。Zeldaはジュネーブ近くのサナトリウムに入り、Fitzgeraldは、スイスの各地を転々と

し、Scottie の養育はパリで保母に託され、時々 Fitzgerald はパリを訪れ、Scottie と共に過ごすというまさに家族離散状態であった。現実と物語の設定は多少違っているが、これらのことが物語の背景になっている。

この作品では、9歳に成長した Scottie は、9歳の Honoria という名前で登場している。夫婦間のちょっとした諍いから、先に帰った夫が妻を締め出してしまふ。義姉は締め出され妹は雪の中をさまよひ歩き、それが原因で亡くなったと夫 Charlie に非難の目を向け、飲酒癖があり、投資に失敗した Charlie には、幼い7歳の少女の養育は不可能と判断し、義姉が引き取って育てている。前2作に比べると、9歳に成長した Honoria の意識が色濃く表されているだけに、読者は、引き裂かれた親子の悲哀と可愛い娘を自分の膝元で育てられない Charlie の不憫さを感じる。

己の災いから“... his child taken from his control, his wife escaped to a grave in Vermont” (208) “Babyron Revisited” と全てが自分の手の中から剥ぎ取られてしまった今、義姉に養育を任せなければならなかった現実を直視し、娘を何とか自分の手元に取り戻し、自分の手で思うように育てたいと思っている。また Charlie にはもう一つの懸念がある。9歳という自己を形成しつつある Honoria が、Charlie への憎しみと敵意の中で育てられたら、いずれ、父へ対する敵意を植え付けられ、父にも敵意を示すようになるのではないかと懸念を抱く。

Charlie became increasingly alarmed at leaving Honoria in this atmosphere of hostility against himself; ... some of that distrust would be irrevocably implanted in Honoria. (215) “Babyron Revisited”

それ故、今回は、Honoria の養育権を取り戻し、一緒に暮らせるようにと願って義姉を訪ねた。

2年間という歳月は、父 Charlie にとっても、娘 Honoria にとっても大きな変化をもたらしていた。10ヶ月ぶりに会った娘 Honoria を連れ出し、食事をし、サーカスを見て、おもちゃを買ってあげ、2人だけの時を久しぶりに過ごそうとするのだが Honoria は自分のはっきりした意思を持ち、おもちゃを買ってくれるという提案を断る。“... we are not rich any more, are we?” (210) “Babyron Revisited” ともうすでに自己を持ち、自分の置かれた状況を判断し、冷静に周囲の状況をもつかめるまでに成長している。そのうえ、もうすでに自分なりの掟をも持っていた。

サーカスを見に行つて、父 Charlie は自分のコートをたたんで座らせようとするのだが、“Honoria proudly refused to sit upon her father’s coat. She was already an individual with a cord of her own” (212) “Babyron Revisited” と、父のコートの上に座るのを拒む。父として、その成長ぶりに多少焦を感じる。自己を完全に形成する前に、自分で Honoria を引き取り、自分の思うように育てたいという思いは更に強くなる。

‘I’m awfully anxious to have a home’ he continued. ‘And I’m awfully anxious to have Honoria in it. I appreciate your taking in Honoria for her mother’s sake, but things have changed now. And I want to ask you to reconsider the matter.’ (213) “Babyron Revisited”

35歳になった Charlie は Honoria を引き取り、まだかわいらしさの残る娘のいる暖かい家庭を持ちたと願っている。“Things has changed now” と言っているように、Honoria も変わったように、Charlie も変わった。酒におぼれ、無軌道な生活をし、多大なる浪費と投資の失敗で Honoria を義姉に託してプラハに発つていった時の Charlie とは全く変わっている。

義兄に酒を勧められるが、“I haven’t had more than a drink a day for over a year.” (213) “Babyron Revisited” ときっぱりと断る。Honoria を引き取らんがために、飲酒癖から立ち直っている。プラハで努力し経済的にも再生している。“I’m able to give her certain advantages now. I’m going to take a French governess to Prague with me. I’ve got a lease on a new apartment” (215) と語っているように、今は Honoria を引き取って、育てるだけの十分な経済力も持ち、Honoria のために家庭教師を雇えるまでに経済的にも立ち直っている。2年前の Charlie とは様変わりしている。“Charlie’s feet were planted on the earth now, ...” (216) “Babyron Revisited” と自他共に認めるまでに、自己改革したのである。それは、ただただ可愛い娘を引き取って一緒に暮らしたいという思いと、娘を自分の思い道理に育てたいという思いからだ。

批評家 Alice Hall Petry は次のように語っている。“No doubt inspired by Honoria.”<sup>3)</sup> Petry は暗に、Charlie は Honoria を引き取りたいという強い思いに駆り立てられ、自己改革したと述べている。Charlie にとって、Honoria が大きな動機付けになっているのは、誰の目からみても明白である。その意味で Charlie にとって

Honorina の存在は大きな意味を持っている。

しかし、数年前の悪事を重ねた仲間が押しかけて来ることにより、娘を引き取る話は流れ、一人寂しく帰ってゆく。しかし、Petry は、次の様に述べている。

The final step in the process of atonement is to remove oneself from the locus of one's past misdeed.<sup>4</sup>

Chary は Honorina の養育権を取り返せなかったが、自分の過去の常軌を逸した乱脈な生活の購であり、清算であったとし、この作品の最後の展開を上記のように肯定している。また、批評家 John Kuel も Charie の自己の建て直しを次のように語っている。

Custody of his daughter may be denied him for six month or more, yet Charie, turning down a drink right before the story terminates, regain Honor, if not Honorina.<sup>5</sup>

Honorina の養育権は取り戻せなかったが、自助努力により、自己の生活を立て直し、自己再生をしているという意味では、Honor, 名誉を取り戻したのだ。

4 作目 “Family in the Wind” は 1932 年 6 月 4 日に、*The Saturday Evening Post* に掲載されている。実年齢 10 歳の Scottie は作中では 8 歳の少女 Helen として登場する。この作品のみ実際年齢と異なっている。実際に登場する部分はわずかであるが、アル中医師と少女の対話から、Scottie への思いが伝わってくる。

この作品の書かれた時期、Zelda は二度目の発作を起こしてボルチモアの精神病院に入院し、病院近くの友人 Turnbull の家「平和社」を借りて住み始めた頃に書かれた作品である。

表題の *The Wind* は竜巻のことを表している。竜巻きに巻き込まれたすさまじい様子や、その後の荒れはてた光景が生々しく描かれている。その光景の中で、主人公 Dr. Forrest は次のように語る。

Peace! He (Dr. Forrest) knew that the present family quarrel would never heal, nothing would ever be the same; it would all be the bitter forever.

And he had seen the placid countryside turned into a land of mourning. There was no peace here. (267) “Family in the Wind”

この語りから、その時期の Fitzgerald の心境を読み取ることができる。家庭内の混乱<sup>6</sup>や作者が抱えている様々な問題とその時の精神状態がこの竜巻に象徴的にあらわされている。再び訪れることのない幸せで平和な家庭生活の崩壊を作者は率直に述べている。

作品の最初に登場する Dr. Forrest は次のように退廃的で、自暴自棄になっている。

“I’m happy,” he continued, “or very miserable. I chuckle or I weep alcoholically and, as I continue to slow up, life accommodatingly goes faster, so that the less there is of myself inside, the more diverting becomes the moving picture without. I have cut myself off from the respect of my fellow man, but I am aware of a compensatory cirrhosis of the emotions . . . I have become an exceptionally good fellow-much more so than when I was a good doctor.” (253) “Family in the Wind”

アル中医師は、破滅的な自己を抱え、医師仲間からの尊敬を失い、医師であることを放棄している。甥 Pinky が喧嘩に巻き込まれ、頭を撃たれ重態である。その手術を頼まれるのだが、医師を放棄した Dr. Forrest は Pinky の手術を断る。そんな退廃的な医師の心の救いになったのが、少女 Helen であった。猫を抱いた Helen に出会い、Dr. Forrest は “This is the sweetest little kid I ever saw” (254) “Family in the Wind” と言っている。この語りから、すさんだ家庭状況の中で、Fitzgerald は Scottie に安らぎを求めていたことを察することができる。

作中竜巻に巻き込まれた Helen の父は Helen を落下物から守るために、下敷きになって死んでしまう。父を無くして身寄りの無い Helen の周りには非情な魂のない宇宙が広がっている。しかし、気丈な Helen は、猫を抱いて何マイルも嵐の中を歩きモントゴメリーまでやってくる。この非情な世界で逞しく生き抜いている Helen に “I (Walt) couldn’t help laughing at how spunky she was.” (270) “Family in the Wind” と賞賛の声をあげる。竜巻の修羅場をくぐり抜け、力強く生き抜いている Helen の姿を目の当たりにして、医師は前向きな生き方に変わってゆく。一度医師を棄てたはずの Dr. Forrest は、竜巻の修羅場とその後の混乱状態の中で、再び医師としての役目を果し、最終的には甥 Pinky を助けることとなる。

父を亡くし、身寄りの無い Helen に出会い一瞬な

ぐさめの言葉をかけたかったのだが“... for a moment he was tempted to say something conciliatory, but he (Dr. Forrest) saw it was no use. He was up against the maternal instinct, the same force that had sent little Helen through the storm with her injured cat...” (271) “Family in the Wind” 母性本能でしっかり子猫を抱え、強く生き抜いているヘレンの自立した姿に、Dr. Forrest は勇気づけられる。Helen に勇気づけられた Dr. Forrest は “After all, a men of forty-five is entitled to more artistic courage when he starts over again. (271) “Family in the Wind” と独白している。45歳の男が再起しようと思ったら人工的な勇気の源が必要だと言っている。Artistic courage とは当然 Helen の存在である。Helen が Dr. Forrest を立ち直らせ、医師として復活させてる。

“You (Dr. Forrest) reckon to practice medicine up there, Forest?” (271) “Family in the Wind” という問に、“I (Dr. Forrest) will try it” と答えている。自暴自棄の医師は、あの力強く生き抜く Helen に勇気づけられ、医師として再起を決意し、モントゴメリーへの片道切符を買い、この地を離れてゆく。

前作品で、自己再生の力を与えた Honoria 同様 Helen も Dr. Forest に新しい人生を送る自己再生力への大きな動機付けになっている。Helen というその動機づけがあってこそ、生活を立て直し、医師として再出発できた。読者は、後半2作品で、Scottie が Fitzgerald への自己再生の力を与えたことを読み取る事が出来る。

## 終わりに

Scottie をモデルにした作品を年代順に4作取り上げて、Fitzgerald の父性愛のあり方を見てきた。第一作目 “The Baby Party” では、Scottie を命の継承と考え、本能的安堵感を持っていた Fitzgerald が、隣の主人との喧嘩により、Scottie を守らなければという保護本能に目覚め、親としての認識を持つ。第2作目 “Out of the Cabinet Maker’s” では、家庭崩壊の兆候が見られ、Scottie を思いやり傷つけまいと、Scottie のために、優しい父性愛を投げかけている。この2作に見られる父性愛は、子供に一方的に注がれるものであった。しかし、後半2作では、子供に注ぐ父性愛が自己再生の大きな要因になっている。

Poetry は近代心理学者 Erick Erison の Generativity という心理学用語を引用し “the impulse to organize and

direct one’s life so as to nurture and protect one’s progeny”<sup>7)</sup> 子供を育て、守ることはるということは、自分の生活を秩序立て、方向づけ、自己を立て直す推進力になっているという意味合いのことを述べている。

第3作目 “Babylon Revisited” では何とか娘の養育権を取り戻そうと、2年間酒を断ち、ブラハで商売も軌道に載せ、自助努力で自己を建て直し、立派に再生している。この、自助努力ができたのも、可愛い娘を引き取り、一緒に暮らしたいという一念があったからだ。

第4作目 “Family in the wind” では、凄まじく荒れ果てた家庭生活の中で、可愛い娘に勇気づけられ、破壊的、退廃的自己から立直り、自己再生している。

これら4作品はすべて Scottie がモデルであり、Scottie が年齢を重ねるごとに Fitzgerald に対する影響力は様々に変化している。特に最後の2作では、Scottie は Fitzgerald の自己再生の動機付けになっている。

... his (chary’s) primary motivation is to care for little Honoria, much as Dr. Janney is motivated by his desire to care for Helen. In each case she is an almost prenatally mature child, a situation which suggests that she is less the concrete motivation behind the desire for a new life than she is the confirmation of the atoned man’s willingness to deny himself, to eschew alcoholism and to work on behalf of others.<sup>8)</sup>

上記の引用から、Scottie は、新しい人生への具体的な動機付けになったのではなく、Fitzgerald の、今までの自己を否定し、自己の生活の立て直す動機付けになったのである。

Fitzgerald は常に Scottie に溢れんばかりの父性愛を注いできた。Scottie を愛しているからこそ、父 Fitzgerald にとって Scottie という存在が励みになり、大きな動機づけになった。崩壊した家庭生活にあり、崩壊した自己を立て直すことが出来るのも Scottie を愛していたからだ。その意味で父 Fitzgerald にとって Scottie の存在は大きかった。

## Works

- F. Scott Fitzgerald, “The Baby Party” *All the Sad Young man* (New York: Scribner’s Sons, 1926)  
 F. Scott Fitzgerald, “Outside the Cabinet-Maker’s” *Afternoon of An Author*. (New York: Scribner’s Sons, 1928)

F. Scott Fitzgerald, "Babylon Revisited" *Taps at Reveille* (New York: Scribner's Sons 1936)

F. Scott Fitzgerald, "Family in the Wind" *Taps at Reveille* (New York: Scribner's Sons, 1936)

#### NOTES

- 1) Andrew Turnbull: *Scott Fitzgerald* (Charles Scribner's Sons, New York, 1962) 190
- 2) Turnbull, 190
- 3) Alice Hall Petry. *Fitzgerald's craft of short fiction*. (U. M.

K research press, London, 1951) 85

4) Petry, 181

5) John Kuehl: *F. Scott Fitzgerald. A Study of Short Fiction* (Twain Publishs, Boston, 1991), 82

6) Rosalind に宛てた手紙には, Zelda の精神崩壊の事を  
"This mess . . . arrived like a thunderclap" と書いている。Petry, 166

7) Petry, 121

8) Petry, 187